書　評

『寄生虫のはなし —この素晴らしき，虫だらけの世界—』

永宗 喜三郎・脇 司・常盤 俊大・島野 智之 編

出版社　：朝倉書店
出版日　：2020 年 10 月 1 日
ISBN　：978-4-254-17174-7
価格　：3,300 円（本体 3,000 円＋税）
URL　：https://www.asakura.co.jp/books/isbn/978-4-254-17174-7/

八木田 健司
Kenji YAGITA

国立感染症研究所寄生動物部
〒162-8640 東京都新宿区戸山 1-23-1

本書「寄生虫のはなし」は，寄生虫を初めて知る人，学ぶ人にも解りやすい寄生虫入門書である．「はなし」というスタイルにはいろいろな意味で身近さという想いが込められているのであろう．原生生物から外部寄生虫のダニ類に至るまで，我々の身近にある「虫だらけの世界」を知ろう，学ぼう，というのが本書のコンセプトのようだ．そしてその虫だらけの世界を「素晴らしき」と表現しているあたり，執筆陣の寄生虫・愛というものを感じる．とかく日陰者扱いされがちな寄生虫のもつ「コワイとキモチワルイ」のイメージを払拭し，真の姿を理解し，正しく付き合い，そして彼らの歴史と生き様から何らかの学びを発見する，これが本書の意図するところだと理解した．なお読み手の側に寄生虫・愛が芽生えるかどうかは，その人次第だ．

本書には様々な寄生虫が最新の情報をもって登場する．選び抜かれた画像等は相当にリアルだ．今なお世界でおよそ 40 万人の命を奪うマラリア原虫，魚の寄生虫食中毒 No. 1 のアニサキス，そして脳に感染してこれを溶かして食べてしまうというアメーバなど，いずれも遭遇することをご遠慮頂きたいものたちだが，まずは正しくそのコワさを知ることが身を守るための心得であることを学ぶ．またコラム欄ではより視野を広げた寄生虫の姿，面白さを味わうことができて楽しい．さらに巻末の実践寄生虫学「採取指南」は出色で，身近な寄生虫の探し方が図解入りで説明されている．誰でもできる寄生虫学実習としておすすめだ．動くリアルな寄生虫を観ることほどインパクトのある学びはない．

寄生虫に対する見方，感じ方は人それぞれであろうから，本書からは「なるほどね」とか「そうかな」とか，読み手各自が思った部分を大事にして，そこから思索，あるいは研究を広げていってほしいと思う．私は少なからず寄生虫・愛を持っている方だが，それはやはりその生き様という点にいろいろと感じるところがあるからだ．寄生生活は楽チンなのは人間社会でのみ通じるはなしであって，本書では本家寄生虫のリアルな生活形態が詳細に記されている．宿主内の寄生環境は，免疫や栄養の面から言ってそれほど恵まれたものではないという実情は意外だ．また宿主動物の絶滅と運命を共にする場合もあるとは，初めて気が付いた．寄生虫の生き様は結構厳しいという表現がやはり適していると思う．が，厳しいとは言え，現在の多様な寄生虫たちの繁栄ぶり，全生物の半数は寄生虫という試算は何だろう．寄生生活の収支は相当にメリットが大きいに違いないとも勘ぐる．これはどういう生き方と表現すればよいのか．したたかなのか，あるいは石の上にも三年，いや何億年なのか？生き方マニュアルが遺伝子に書いてある？どうすれば分かるのだろ

CC BY
Tel: 03-5285-1111(ext.2729) ; Fax: 03-5285-1173
E-mail: kyagi@nih.go.jp
Received: 09 December 2020

う．本書続巻で答えを待ちたい．

本書では様々な原生生物が出てくる．その個々の顔を知るのも面白いが，寄生とは何か，なぜ寄生という生き方が生まれたか，という本質的な問題の中で原生生物にスポットライトが当てられていることに注目したい．原生生物にみられる高次共生，詳しくは本書を読んで頂きたいが，その実態に基づく「細胞内共生による宿主の変化が寄生化につながった」というアイデアは明快で，寄生はそこから始まった，といえるポイントがかなり絞られたのではないか．さらに研究を進めて共生，寄生そして進化の歴史を原生生物に語らせよう．何といっても，彼らは歴史の生き証人であるのだから．そして流れとしては原生生物の寄生体が多細胞生物に寄生することになるのだが，そのとき一体何が起きるのか？　エッ，もう起きてる？ヒトも？・・・　このストーリーの続きは本書でどうぞ．